

安倍晴彦 様

『犬になれなかった裁判官』を拝読し、安倍さんの生き方に改めて感銘を深くしましたので、所感をお伝えできればと思います。

1. 裁判所が、体制批判者とみなす裁判官を差別し続けてきたことは、外部からもおよそ窺えたことでしたが、今般生々しい内部事情に触れ、その仕打ちの陰湿、執拗さにあきれるとともに、安倍さんが最後まで踏みとどまったことはとても大変だったことが分かりました。

山崎豊子の小説「沈まぬ太陽」は航空会社の労組幹部に対する差別待遇を克明に描いていますが、この場合は会社対労組という対抗の構図があり、会社から抑圧されても、組合の仲間たちとの連帯が僅かでも救いの場となっています。裁判官は、世間にうたえることもできず、仲間との団結権もなく、孤軍奮闘するだけです。

弁護士たちも青法協加入裁判官は可哀そうだと想っていても遠くから見ただけで、自由に交流することもできませんでした。私も、学友であった守屋克彦君との交際は何となくはばかられていました。

信念 正義はいつか勝利する、歴史が明らかにしてくれる があっても、孤独のなかで、果てしなく続けられる日々の抑圧に、耐えることは生身の人間としてはつらいものでしょう。労働運動家などでこうした差別待遇を受け、病気になったり、命を縮めたりした例をいくつか知っています。

2. どこでも行われる差別の第一、給料を著しく低くおさえる。人間は経済が基礎です。その給料の格付けが、長年同僚の何段階も下で、昇給しても8年後輩と一緒になったり、定年退職の日につまり一日だけ並みのレベルに達した。在職期間ずっと完全に差別され、トータルですごい格差です。裁判官が転勤先から自宅へ帰るのに、新幹線は高いので遠距離バスを利用せざるを得なかったなどひどい話です。

裁判官会議で、後輩が座る席順を毎年追い越していくというのも傍らからは愚かな田舎芝居を見ているようですが、本人にとっては達観しているとはいえ、実に嫌なものでしょう。司法修習生にも接触する機会を与えない、若い世代と隔離し、影響を与えるような地位につけない、これも壮年にしてすでに引退生活に入らされたようなものでさびしい限りです。そして最後の決定打、合議の裁判長に一度もならせなかった。つまり重要な事件を担当させない、あるいは後輩の裁判官と一緒に仕事をさせず、切り離し孤立させる。これは職務の剥奪に他ならず、安倍さんも「私が受けた差別の中での最大の究極の差別である」と書いています。どこでも職業人は一様に差別のうちでも仕事をさせてもらえないのが最もこたえるといえます。

裁判官はとくに職業に誇りをもち、社会運営に光明を灯す判決を書くことに生甲斐を見ていると思います。こうした安倍さんの希望がかなえられる機会が全くうばわれてきた。裁判所が陋劣にも、意に添わない裁判官を窓際に追いやり生甲斐を奪い飼い殺しにしたというわけです。

ナチスはユダヤ人抹殺の様々な手法を考案しましたが、日本の裁判所もそれに劣らず差別政策のすごい知能犯です。

3. 安倍さんが毅然として姿勢を貫いたことについて、朝日新聞の編集委員書評は、「ふつうの市民」の感覚をもっているためととらえ、どんな不遇にも揺るがない人間味が読みとれるとしています。

私は少し違った色合いの見解をもっています。安倍さんが尊大な官僚でなく、率直な市民感覚に充ちていることはそのとおりです。ただふつうの市民は自己実現を希求するというより、妥協的なものでもあると思います。多くの裁判官も庶民の出といえるでしょう。そして初心は素直で正しかったはずですが、しかしやがて殆どが長いものにまかれてしまいます。つまり不屈の気概は一般市民感覚とは別次元のものだと思います。

また安倍さんの姿勢は節を全うしたというのでも説明できない気がしています。社会も価値体系も大きく変動しました。むしろ漠然としてではあってもイデオロギーなどを超えた大きな見識に支えられていたかなというふうにも考えます。

さらに私は安倍さんの資質のなせる技かとも思います。このお便りをするにあたって、私は好きな書物の一つであるプラトンの国家論に目を通しました。

「しかるべき正しい教育を与えられた者は、美しくないものを鋭敏に感知してそれらを正当に嫌悪しつつ、美しいものをこそ誉め称え、それを喜びそれを魂の中へ迎え入れながら、それら美しいものから糧を得て生まれ、みずから美しくすぐれた人となるだろう。そしてやがて理が彼にやってきたときには、このように育てられた者こそは誰にもまして、その理と親近な間柄となっている。」

付け加えてプラトンは、魂が思慮があり勇気があるとき、外部からの影響で乱されたりしないのであって、勇気、節度、敬虔、自由の資質は子供のときからの養育によって形成されると説明します。

私が司法修習生のとき、安倍能成の弟君であり後に大阪高裁長官を勤められた安倍さんの御尊父は司法研修所長でした。折りにふれての講話や旅行先の宴会などで、俗臭の小役人とは一味違った洒脱な気品を感じさせてくれました。安倍さんの飾らない人柄と勇気は出自と無関係でないと思えるのです。

4. 安倍さんは、当時を振り返り、「落ち目」になって、「負け戦」を戦ったことが貴重な体験になったと語っています。一般に社会の底辺を知る者だけが人生全体を知っているといわれます。不遇にあったことによって、かえって人間の様々な品格を見ることができた、

権威に弱く盲従し逆に部下には横柄という卑小な裁判官たちの正体も落ち目になってよく見えたというのもそのとおりでしょう。

単独で周りの暴圧に抗するだけの力もないため、静かに自分の仕事だけしてせめて不正に汚されずに世を送るという裁判官も結構いるのかと想像していたのですが、実態はそれほど甘くなく、大多数は朱に交わって赤くなり、ついには安倍さんを避け、さらには話しかけても返事をしないようになるなど、保身に汲々としている有様はなさげなく軽蔑の他ありません。

この人たちは権力の側に身をおいていることに優越感と存在価値をみているのでしょうか、裁判所の使命の自覚などどこへいつているのでしょうか。

長年、裁判で感ずることは、裁判官たちが事件について深く事情全体を知ろうとはせず、形式的に一丁あがりの早じまいをしようとする傾向が強いことです。私は昔から裁判所が「正義の殿堂」という幻想はもってこなかったのですけれど、繰り返し深みのない審理の様相に触れ、古い構造が殆ど変わっていかないことを、いまもにがにがしく感じさせられている日頃です。

この本で裁判官の自主性、個性が抑圧されている情景が部分的にですが一層理解できました。

残念ながら、自我を断念して集団への忠誠、同調性を獲得したものだけが存在を許されるこの体制は、まだ堅固で容易に揺るぎそうもありません。

いま政治の世界は、腐敗が露呈し、支配機構の内部衝突も激しくなり、すでに瓦解が始まっていて、もう少しで体制がガラガラと崩壊することになりそうです。裁判所はその後に外圧によって初めて改革に着手されるということになるほかないようです。そのとき、体制に身心をあずけきってきた人々には、もし生存していれば愕然とし自分の人生は何だったのかということになるのでしょうか。

5. いずれにしる安倍さんがこの本によって投じた一石は大きな効果をもつと思われます。国民に隠されてきていた司法の暗黒部分が受難者の体験によって生なましく伝えられています。誰かがやらなければならなかった重要な役目でした。

安部さんたちは戦いの先駆者で、さしあたり「敗者」でありましょう。かつてこんなふうに裁判所で境涯抑圧され、またそれに抗しつづけた例もなかったでしょうから。堂々たる敗退者として、役割を演じてくれたということになります。

「人の心をかかすばらしく高揚させるものとしては、うちかち難い運命とたたかって没落する人間の姿にまさるものはない」(ツヴァイク、スコット大佐)

勝敗は時運です。大事なものは人々の心に何を残したかです。

「精神の見地からは、『勝利』と『敗北』という言葉は一般におこなわれているのとはまったくちがった意味をもってくる。……人類のほんとうの英雄というのは、そのうつろいやすい帝国を建設した連中のことではなくて、身をまもるすべのないままに権力にうち敗かされたひとびとのことであり、精神の自由のたたかい、この地上における人間的な思想

の最後の勝利をめざすたたかいのなかで、うちまかされたひとびとのことである。」(ツヴァイク、権力とたたかう良心)

時代を拓く新しい芽は、どうしても古い体質のなかで、苦衷と渴望を味わう他ないものようです。こうした歴史の弁証法については、ベンヤミンが深い洞察を行っていると考えます。それによれば、その時代によってはみとめられず、つぶされねばならなかった未来への希望がやがて起動力となるといいます。星たちは現実に一敗地にまみれ見えないのであるが、やがて人々の精神のなかで復活し意味が見出され、新しい文脈で息を吹き返してくるというのです。私たちもこの種のたくさんの歴史の実例を知っています。安倍さんは強靱な精神によって明日の歴史の種をまき、あるいは伏流水となりました。

退官した安倍さんが調停委員などの間で尊敬される伝説の人となっていることを、安倍さんを直接知らない新しい調停委員からきいたこともあります。世間はすでに分かっているのです。

安倍さんは若いときから堂々と所信を貫いてきました。60年安保時、駆け出しの弁護士であった私が監置処分を受けたとき、修習生の安倍さんから手紙を頂戴し、豪胆さに驚くとともに大変励まされたことを思い出します。

釈迦に説法のような引用の多い文章になってしまいましたが、またも最後にカール・レーヴィット「歴史の意味」から借用したフンボルトの言葉を贈ります。

「どんなに烈しい嵐の中でも決して倒れない……いくつかの基柱があり、どこへ押し流されるとも、われわれは繰り返し小屋を建てることができる。現実に世界のあらゆるものを自己の思想と感覚の網に結びつけることを果たしえた人があるとすれば、……そして自己の周囲のもろもろの出来事を見て、より深い孤独へ向う契機とし、しかも、その孤独の中で常に自己の感動や行動を活発に維持できる人があるとすれば、……かれこそは人間の到達しうるかなりの所に到達した人といえよう。」

敬具

(2002年7月)